

を記録した。これには収益面の好転を背景に、前月に続き自動車、商社などの業種で大口増資がみられているほか、決算月の関係から増資が集中したという事情も響いている。なお10～12月には約1,330億円(月平均443億円)と、年度前半(月平均319億円)に比べれば拡大傾向が見込まれるが、株式市況低迷などから既定計画の繰延べなど増資に対し慎重に構える気運も業界にはいくらかずつ浸透しているものとみられる。

### 増 資 状 況

(単位・億円、カッコ内前年同期)

	市場第1部 上場会社	市場第2部 上場会社	合 計
37年7～9月	1,515(1,562)	254(172)	1,769(1,734)
10～12月	1,001(1,751)	161(150)	1,162(1,901)
38年1～3月	717(1,392)	94(79)	811(1,471)
4～6月	452(1,466)	121(113)	573(1,579)
7～9月	1,155(1,515)	184(254)	1,339(1,769)
38年7月	129(459)	52(98)	181(557)
8月	371(668)	83(75)	454(743)
9月	655(388)	49(81)	704(469)
10月(見込み)	343(321)	44(67)	387(388)

9月中の公社債、事業債の起債状況をみると、表面発行額では408億円と前月比16億円の増加であったが、償還額(定時償還をも含む)を控除した純増ベースでは前月に引き続き満期債の集中による圧迫が強く、223億円と前月比14億円方減少した。債券別にみると、電力債および地方債が純増ベースで前月比ほぼ横ばいであったのに対し、一般事業債、政保債は満期償還のほか抽せん償還がかなりの額に達したため、いずれも表面発行額の増加にもかかわらず、純増ベースでは8億円方減少を示した。

なお、事業債の個人消化は9月も引き続き増加しており、注目される(個人消化額の全体に占める比率、7月10.1%、8月11.0%、9月15.4%)。これは利回り面での有利性の再認識や株式市況の不さげなどを反映しているほか、証券会社の売込み努力も大きく寄与しているとみられる。もっとも、これらのなかには証券会社のシェア競争など

による無理な消化もないとはいえないようである。

一方、9月中の金融債(純増ベース)は都地銀および信金など中小金融機関の期末決算対策買いによる利付債買入れの増加もあって、前月比13億円の増加をみた。

加入者引受け電々債の利回りは、基調的には金融市場の小締まりから強含みとみられるが、米代金支払に伴う農中系統機関などからの引合いなど季節的要因もあって、10月にはいつてからは若干低下を示している(46年償還利付債利回り、8月末8.54%、9月末8.55%、10月12日8.50%)。

### 起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内純増額)

	38年 8月	9月	前月比	38年10月 見込	37年 10月
事業債	227.6 (125.6)	238.0 (118.9)	+10.4 (-6.7)	244.6 (121.5)	162.3 (84.1)
一般	119.6 (63.5)	131.0 (55.6)	+11.4 (-8.0)	133.6 (69.9)	93.2 (36.7)
電力	108.0 (62.1)	107.0 (63.3)	-1.0 (+1.2)	111.0 (51.6)	70.0 (47.4)
地方債	38.0 (22.5)	27.0 (22.4)	-11.0 (-0.1)	27.0 (25.4)	26.2 (18.7)
政保債	126.0 (89.8)	143.0 (82.1)	+17.0 (-7.7)	103.0 (93.1)	93.0 (59.1)
計	391.6 (237.8)	408.0 (223.4)	+16.4 (-14.4)	374.6 (240.0)	282.4 (161.9)
金融債	745.9 (288.2)	795.4 (301.4)	+49.5 (+13.2)	920.3 (374.0)	734.1 (278.8)
利付	351.7 (230.4)	400.9 (243.5)	+49.2 (+13.1)	424.7 (253.0)	359.5 (249.7)
割引	394.2 (57.8)	394.5 (57.9)	+0.3 (+0.1)	495.6 (121.0)	374.6 (29.1)

(注) 1. 9月実績および10月見込みの純増額には一部推定数字を含む。  
2. 金融債の10月見込みは期待額。

## 実体経済の動向

### ◇生産の増勢基調続く

8月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月比+0.1%となった。7月には、鉄鋼を中心とする

生産調整の緩和、電力向け一部大型機械の完工などから大幅増産をみたが、当月はそうした要因もなく、むしろ大型機械の反動減や自動車の減産（夏期休暇ならびにモデルチェンジのため）などが響いて、大勢横ばいに推移した。しかし生産の基調としては、引き続き着実な増勢にあるものといえよう。

8月の生産を用途別分類でみると、まず一般資本財（輸送機械を除く資本財）は、前月大幅増加のあと微減となった。タービン、発電機など一部大型機械の反動減があったものの、一方、標準誘導電動機、標準変圧器などの中小関連汎用機器、化学機械、事務用機械などは着実な伸びを続けている。この間輸送機械は、上記事情から各車種にわたって減産し、また消費財も、非耐久消費財はほぼ横ばいながら、耐久消費財が、卓上扇風機、電気冷蔵庫を中心に減産となった。一方生産財は、前月の生産調整緩和による大幅増加のあと、当月も鉄鋼、非鉄、化学など中心に増勢を続けたほか、建設資材も、需要最盛期を控えたセメントの増産を主因に、前月に続きやや目立った増加を示した。

特殊分類別生産動向

(季節調整済み、前期(月)比増減率%)

	37年 7～ 9月	10～ 12月	38年 1～ 3月	4～ 6月	38年 6月	7月	8月
投資財	-1.2	-3.3	2.8	3.8	2.4	8.0	-0.6
資本財 (輸送機械を除く)	-2.3	-6.1	5.9	3.5	2.3	8.8	-2.1
建設資材	0.4	-8.0	9.0	-0.9	5.6	10.5	-0.2
消費財	1.8	4.2	-4.4	3.6	2.0	7.3	2.4
耐久消費財	-0.7	1.1	-2.6	5.9	-1.2	1.7	-0.5
非耐久消費財	-0.6	-0.1	0.8	9.5	-1.5	1.2	-2.2
生産財	-1.2	1.9	-2.5	2.2	-1.0	2.0	-0.1
	-0.1	0.3	2.8	5.7	0.1	3.9	0.8

(注) 通産省調べ(35年=100)。

次に8月の鉱工業出荷(季節調整済み)は、前月比+0.2%の微増となった。8月の動きを用途別分類でみると、生産財の増加と耐久消費財の減少が目立っている。生産財では、7月からの生産調整緩和にもかかわらず出荷は順調に推移しており、8月は前月に続き石油製品が重油の大幅増加を始めとしてかなりの出荷好伸をみたほか、鉄鋼

関係も順調な増加を示した。一方耐久消費財の減少には、生産動向と同様、一部民生用電気機器における大幅な落ち込みが響いている。

この間8月のメーカー製品在庫(季節調整済み)は+2.0%の増加となり、在庫率も若干上昇した。製品在庫の推移をならしてみると、このところ総体として、下げ止まりないし増加ぎみとなっている。生産財などは順調な出荷にささえられて減少しており、増加をみているものも、現在のところおおむね生産、出荷の増加に見合ったものと思われるが、耐久消費財のごく一部には、やや滞貨的色彩の濃い在庫増も見受けられる。

生産需給動向(鉱工業)

(季節調整済み、増減率は%)

	37年 7～ 9月	10～ 12月	38年 1～ 3月	4～ 6月	38年 6月	7月	8月
生産	129.2	128.2	130.0	136.7	136.9	143.6	143.8
指 数	129.2	128.2	130.0	136.7	136.9	143.6	143.8
前期(月)比	-0.8	-0.8	1.4	5.2	0.2	4.9	0.1
前年同期比	5.2	1.2	0.6	5.0	5.6	11.8	-0.2
出荷	126.7	129.9	131.8	136.2	135.8	139.8	140.1
指 数	126.7	129.9	131.8	136.2	135.8	139.8	140.1
前期(月)比	-1.4	2.5	1.5	3.4	-0.4	2.9	0.2
前年同期比	4.3	5.8	5.2	6.3	6.8	3.5	-1.3
製品在庫	166.0	172.2	168.6	167.5	167.5	168.8	172.1
指 数	166.0	172.2	168.6	167.5	167.5	168.8	172.1
前期(月)比	4.5	3.7	-2.1	-0.7	-1.2	0.8	2.0
前年同期比	34.8	20.6	9.8	5.1	5.1	0.9	-0.9
在庫率指数	127.8	132.0	125.1	122.9	123.3	120.7	122.8

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。  
前年同期(月)比は原指数による。

8月のメーカー原材料在庫をみると、輸入素原材料は減少したが、国産製品原材料の増加から総合で+1.4%(季節調整済み)と前月に続き増加し、在庫率でみても、2月以来半年ぶりにわずかながら上昇した。輸入素原材料の減少は、鉄鋼原料(鉄くず、鉄鉱石)では引き続き増加をみた反面、繊維原料(綿花、羊毛)が減少したためである。通関状況などからみても、4月ごろ以降かなりの回復をみてきた輸入素原材料在庫もほぼ適正とみられるところまできており、当面一服傾向といえよう。一方国産製品原材料は、機械メーカーの普通鋼々材、機屋・2次製品メーカーの原系在庫の増加を中心に6月以来の増加傾向を持続し

## 需 要 関 係 の 指 標

	37 年 9 月	37 年 12 月	38 年 3 月	38 年 6 月	38 年 7 月	38 年 8 月
素 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	108.9 ( 94.7)	110.0 ( 94.7)	101.9 ( 83.7)	103.2 ( 83.0)	108.1 ( 83.7)	110.9 ( 84.4)
うち 輸 入 分 (在 庫 率)	105.6 ( 91.7)	108.0 ( 99.6)	101.9 ( 84.2)	107.6 ( 84.3)	115.6 ( 86.7)	114.2 ( 84.6)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	117.2 ( 96.4)	116.6 ( 96.8)	115.6 ( 91.9)	116.0 ( 86.0)	116.4 ( 84.4)	118.8 ( 85.7)
販 売 業 者 在 庫	144.5	156.3	162.7	160.9	163.7	
	37 年 10～12 月平均	38 年 1～3 月平均	4～6 月平均	38 年 6 月	38 年 7 月	38 年 8 月
機械受注(海運を除く民需) (同季節調整済み)	404 ( 448)	498 ( 450)	534 ( 563)	604 ( 606)	516 ( 543)	532 ( 579)
機 械 販 売(船舶を除く) (同季節調整済み)	836 ( 832)	930 ( 929)	854 ( 881)	908 ( 890)	852 ( 940)	890 ( 883)
資 本 財 出 荷 (輸送機械を除く)	127.1	141.1	142.0	140.8	151.6	151.8

(注) 在庫出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。  
機械受注、販売は経企庁調べ。同季節調整は統計局センサス法による。

た。5～6月ころを中心に若干在庫手当が進んだが、それがメーカー在庫となって現われてきたものとみられる。従来はば一貫して低下をみてきた在庫率も、おおむね圧縮の限度にきた感があり、横ばいぎみとなっている。

なお7月の販売業者在庫(季節調整済み)は、+1.7%と前月に続き増加した。輸入素原材料は、前月かなりの増加をみたことの反動もあって、綿花、重油を中心に大幅な減少をみたが、大宗の製品在庫は自動車の増加を主因に増加した。

この間設備投資関連指標の動向をみると、まず8月の資本財出荷(輸送機械を除く、季節調整済み)は前月比ほぼ横ばいにとどまり、また機械販売高(船舶を除く、季節調整済み)は若干の減少をみた。しかしながらこれは、6、7月において電力向けなど一部大型機械の完工集中をみたことの反動が響いており、ならしてみれば、工事ベースでの設備投資は、なだらかな回復基調にあるものといえよう。一方8月の機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、579億円、前月比+6.6%となった。最近の機械受注の推移をみると、5、

6月にかかなりの増加をみたあとやや低目に推移しており、7、8月をならしてみると、4～6月期比はほぼ横ばいにとどまっている。しかしこれは、電力、運輸など非製造業からの受注がやや低下をみているためであり、製造業では、窯業からの受注がひとところに比し低下しているほかは、その他主要業種はおおむね着実な回復基調にあり、鉄鋼も水準としては低いながら若干増加傾向を示していることが目立つ。こうした機械受注の動向からみて、設備投資の先行きは、引き続き総じてなだらかな回復歩調を続けているものといえよう。

## 機 械 受 注 状 況

(単位・億円、カッコ内前年同期(月)比増減率%)

	37年 月平均	38年 1～3 月平均	4～6 月平均	38年 7 月	38年 8 月
総 額	855 (-25.3)	959 ( 9.5)	1,076 ( 34.2)	1,278 ( 51.8)	1,138 ( 42.8)
民 需	521 (-36.8)	540 ( 16.8)	553 ( 22.3)	529 ( 27.4)	519 ( 24.9)
同(海運を 除く)	476 (-39.1)	498 (-15.5)	534 ( 27.0)	516 ( 36.3)	532 ( 37.5)
官 公 需	141 ( 2.2)	108 (-32.4)	181 ( 2.2)	143 (-37.9)	161 ( 25.6)
外 需	144 ( 16.1)	239 ( 174.5)	274 ( 117.9)	535 ( 253.7)	391 ( 86.9)
うち 船 舶	77 ( 70.0)	136 ( 301.1)	147 ( 281.4)	465 ( 392.2)	330 ( 128.7)
その他	67 (-14.7)	103 ( 107.5)	127 ( 52.7)	70 ( 23.3)	61 (- 6.1)

(注) 経企庁調べ。127社。

## ◇商品市況、繊維、鉄鋼立ち直りのきざし、その他商品も総じて堅調

9月から10月前半にかけての商品市況をみると、このところしばらく低迷を続けてきた鉄鋼、繊維によりやく底入れ感が台頭、一部に小反発がみられたほか、その他の商品も本格的な需要期を迎えて、総じて堅調のうちに推移した。

まず主要商品の動きをみると、繊維では9月前半から生糸を除く原糸が軒並み小反発したほか、織物もわずかながらに上伸、また鉄鋼も9月前半にくず鉄、線材2次製品が堅調を示すなど一部に底入れ感が出始め、さらに10月にはいるとこういった地合いはいっそう広がり、棒鋼、厚板が小反発をみた。さらに非鉄も、輸入地金の出回りなどから電気銅がじり安商状を続けているほかは、鉛、亜鉛とも引き続き上伸歩調を持続している。このほか化学(とくに硫酸、塩酸、か性ソーダといった主要無機薬品類)、国内材、合板が上伸、石油、石炭、紙が強含み、セメントが強保合いとなっている。なお砂糖は9月央までじり安商状を続けていたが、後半月になると、世界的な需給ひっ迫がみなおされ海外糖価が反騰、これを映じて国内糖価もかなり大幅な値上りを見、従来の最高値をつけた。

最近の市況の動きでまず注目されるのは、前述のように、従来軟化傾向のうちにあった鉄鋼、繊維といった主力商品にやや好転のきざしが見えはじめたことである。

市況好転の第1の要因は、本格的な需要期にはいって徐々ながら実需が上向いてきているということである。たとえば鉄鋼の場合、棒鋼、線材2次製品が小反発をみたのは、土建関係の需要の伸びを映じた荷動きの活発化による面が大きいものと思われる。好転をみた第2の要因は、従来市況面にのしかかっていた心理的な不安材料、すなわち、ケネディ教書を起因とする国際収支や金融情勢の先行き不安感、あるいは操短緩和、輸出環境の悪化などといったものが、本格的な需要期入りを迎えて、気分的に見直され、それがここ2ヵ月余りの間に落ち込んだ安値相場を訂正しようとする方向に働いた点にあるものと思われる。たとえば繊維市況の反発の背景に、先安とみて売りこんだ仕手筋の買戻しや新規買い仕手の動きがかなり影響していることなどは、業界が今まで過大評価していた前述の不安材料をここへきて当面それほどのことはあるまいと見直してきたことの事例とみ

てきしつかえあるまい。

最近の市況動向でいま一つ注目されるのは、鉄鋼、繊維以外の従来比較的堅調のうちにあったその他商品が、いっそう堅調の度合いを強めてきたことである。たとえば鉛、亜鉛が一段と需給ひっ迫の様相を強め市況も続伸をみたほか、紙もクラフト紙、段ボール原紙などで従来からみられた品不足傾向がここへきて一段と強まり、市況も一部で上伸した。さらに石炭は需要がかなり伸びている反面、供給が炭鉱の閉山あるいは人員整理の予想以上の進展から伸び悩んだため、需給関係はここ1〜2ヵ月の間に著しく引き締まり、一部品種には品不足すらみられるに至った。したがって市中の安物は完全に姿を消しているほか、暖房用炭など一部に上伸したものもみられた。

このように鉄鋼、繊維を除く他の商品が堅調の度合いを強め、あるいは上伸をみた背景には、季節的な需要増のほかに、鉱工業生産の上昇に伴う実需の確実な伸びがあり、したがって相場は地合いとしてもかなり堅調のうちにあるものといえよう。

以上のように最近の市況の大きな特色は、主力商品とその他商品との間に程度の差はあるものの、市況全体として、ようやく好転のきざしが見られ始めたことであろう。問題はこのような動きが、今後どのように展開してゆくかにあるが、この点につき業界のおよその感触を総合してみると、その他の商品はともかくとして、鉄鋼、繊維については、目下の供給余力や減産緩和予想などから、市況の先行きにそれほどの期待は持ち得ないとする向きが多い。したがって鉄鋼、繊維が商品市況をリードして市況全般をおしあげるといった事態は当面予想されず、基本的には、従来のごとき跛行的な市況がなお当分続く公算が大きい。

本行卸売物価は、9月前月比+0.2%と続騰した。これは木材・同製品および食料品の続騰が主因である。また産業別特殊分類でみると、工業製品は製材、家具・建具類、洋食器など

## 卸 売 物 価 指 数 の 推 移

(単位・%)

	引締め前 33/11~ 36/9	引締め後 36/10~ 37/10	解 除 後 37/11~ 38/9	最 近 の 推 移						
				38年 7 月	8 月	9 月	9 月 上 旬	中 旬	下 旬	10 月 上 旬
総 平 均	+ 5.8	- 3.2	+ 2.9	- 0.1	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.2	保 合	保 合	+ 0.2
食 料	+ 2.8	+ 0.2	+ 7.3	- 0.2	+ 0.9	+ 0.6	+ 0.1	- 0.2	+ 0.4	+ 0.6
織 維	+ 8.9	- 4.3	+ 10.3	- 0.5	保 合	- 0.2	+ 0.2	保 合	- 0.1	+ 0.5
鉄 鋼	+ 6.3	- 11.3	+ 2.8	- 0.2	- 0.3	- 0.4	- 0.2	- 0.2	保 合	+ 0.1
非 鉄	+ 7.8	- 7.1	保 合	+ 0.3	+ 0.1	- 0.1	- 0.1	保 合	+ 0.1	+ 0.2
金 属	+ 12.0	- 4.2	- 0.1	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.2	保 合	保 合	保 合
機 械	- 2.2	- 1.6	- 1.1	- 0.1	保 合	- 0.1	保 合	保 合	- 0.3	- 0.1
石油・石炭	- 7.9	- 2.7	- 0.3	- 0.2	- 0.3	- 0.2	保 合	- 0.1	- 0.2	+ 0.5
木 材	+ 37.6	- 4.2	+ 3.2	+ 0.3	+ 1.6	+ 2.1	+ 1.4	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.2
窯 業	+ 6.4	+ 3.7	- 0.6	保 合	+ 0.3	保 合	保 合	保 合	保 合	+ 0.2
化 学	- 3.0	- 4.3	- 0.3	- 0.4	- 0.1	- 0.2	- 0.1	保 合	+ 0.1	保 合
紙 ・ パ	+ 7.7	- 5.4	+ 6.0	+ 0.4	+ 0.1	- 0.1	- 0.1	保 合	+ 0.1	保 合
雑 品	+ 18.3	- 0.2	- 0.5	+ 0.1	- 0.2	+ 0.2	保 合	+ 0.1	+ 0.6	+ 0.3
工 業 製 品		- 3.4	+ 2.0	- 0.2	- 0.1	保 合	+ 0.1	保 合	保 合	+ 0.2
非工業製品		- 2.6	+ 5.8	+ 0.3	+ 1.4	+ 0.7	+ 0.4	+ 0.1	保 合	+ 0.3

の上昇を、普通鋼鋼材、乗用車、生糸などの下落で相殺して保合い、一方非工業製品は牛・豚肉、鶏卵、国産原木、薪炭など農林水産業生産物の上昇を主因に+0.7%の統騰となっている。

9月の本行小売物価(東京)は前月比+1.5%と10か月間の統騰となった。類別にみると「食料品」では野菜、鮮魚が入荷期にもかかわらず生育遅れや不漁を反映して統騰した一方、「食料品」以外では工賃高を主因に「繊維製品」をはじめ各類別軒並み上昇している。また9月の消費者物価(東京)は前月比+0.8%と反騰した。これは前月大きく値下がりした野菜の反騰による「食料」の上昇および衣料品の季節的値上がりによる「被服」の上昇が主因である。

8月の本行輸出物価は国内市況を映じた繊維、金属の下落を主因に前月比-0.1%と統落した。一方、本行輸入物価は、とうもろこし、小麦、羊毛の増産見越し、生ゴムの生産過剰傾向などから、「食料品」「繊維品」「動植物・同製品」が下落、総平均で前月比-0.3%となった。

## 消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		対前年度比 上 昇 率		最近の推移			最近月 の前年 同月比	年初来
		36年 度平均	37年 度平均	38年 7 月	8 月	9 月		
消費者物価 (東京)	総 合	+ 6.1	+ 6.6	+5.0	-2.6	+0.8	+ 9.1	+ 6.0
	食 料	+ 6.7	+ 7.2	+1.5	-6.3	+1.1	+11.5	+ 7.7
	家賃地代	+ 4.4	+ 3.7	+1.5	+1.0	+1.1	+11.3	+ 7.1
	サービス	+11.7	+13.8	+0.1	+0.4	+1.2	+15.2	+14.1
	公共料金	+ 4.5	+ 1.1	0	0	0	+ 0.8	+ 0.1
	そ の 他	+ 3.2	+ 3.1	-1.2	+0.3	+0.3	+ 3.6	- 0.2
	被 服	+ 5.0	+ 5.9	-0.4	+0.1	+1.7	+ 6.1	+ 3.2
本行小売物価	光 熱	+ 3.3	+ 1.3	-0.2	+0.1	+0.1	- 0.3	- 1.4
	住 居	+ 6.0	+ 3.0	+0.2	+0.3	+0.6	+ 4.9	+ 3.0
	雑 費	+ 6.5	+ 7.9	-0.5	+0.5	+0.3	+ 9.3	+ 7.0
	総 平 均	+ 5.6	+ 3.6	+0.2	+1.1	+1.5	+10.1	+ 9.0
本行輸入物価	(食料を除く)	+ 4.2	+ 2.7	+0.2	+0.5	+1.8	+ 6.8	+ 5.2
	食 料	+ 6.7	+ 4.3	+0.1	+1.7	+1.3	+12.5	+11.8
	織 維	+ 2.2	+ 3.2	+0.2	+0.8	+4.0	+13.2	+10.9
本行輸出入物価	輸 出	- 0.3	- 0.3	-0.7	-0.1		+ 4.2	+ 3.3
	輸 入	+ 0.7	- 1.8	-0.6	-0.3		+ 5.9	+ 4.7

# ◇貿易収支の基調は悪化傾向、長期資本の受取は目立って減少

9月の為替収支は、輸入が季節的減少期にあつたため貿易収支で若干の黒字をみたが、資本収支は米国のドル防衛措置の影響から受取の減少が目立ち、結局総合では3百万ドルの赤字となった(誤差脱漏+5百万ドル)。まず経常勘定では、貿易外が期末の商社関係諸経費支払増、ガリオア・エロア借款利子支払などから35百万ドルの払超に達したが、貿易収支は21百万ドルの黒字となったため、赤字幅は従来に比し若干縮小した。しかし、季節性を考慮すると、輸出は引き続き好調であるが、輸入は前月に近い高水準を保っており、貿易収支の基調は引き続きかなりの逆調となっている。

一方、資本収支では、長期資本は米国のドル防衛措置の影響が表面化してADR、外債発行が全くみられなかったほか、ガリオア・エロア借款の元本返済もあって、黒字幅は21百万ドルと、前月の半分以下にとどまった。また短期資本も、ユーロ・マネーが前月末の邦銀取入金利引下げの影響

で前半月に流出がかさんだため月中でもかなりの払超となったので、外銀借入の増加にもかかわらず若干の赤字を示した。

9月の輸出は、為替ベースで前年同月比+11%と引き続き好調である。通関の伸びは前年比+6%と若干伸び悩みの感があるが、季節性を除いて考えると4~6月水準に比較し5%の増加であり、着実な伸長といえる。これを品目別(通関)で見ると、繊維(合成繊維を除く)、雑品が後進国との競合もあって不振を続けているが、船舶、自動車を中心とする機械、化学肥料を主因とする化学製品などは相変わらず好調を維持している。ただ、これまで伸長を続けてきた鉄鋼が、ここ2~3ヵ月みられた先進国向け成約不振の影響からやや伸び悩みの傾向がうかがわれる。

先行きについてみると、輸出認証は9月にはいってやや伸び悩みを呈しているが、信用状は前年同月比+14%、季節調整後の前月比+4%と依然高水準を続けている。信用状の内容をみても、機械がほとんど全地域向けに伸びており、懸念され

## 輸 出 認 証 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	為 替 収 支			(単位・百万ドル)		
	38年 1~3月	4~6月	7~9月	38年 7 月	8 月	9 月
輸 出	380 ( 351)	429 ( 386)	461 ( 411)	454 ( 413)	468 ( 405)	461 ( 414)
輸 入	404 ( 392)	450 ( 397)	471 ( 355)	484 ( 375)	488 ( 350)	440 ( 340)
貿 易 尻	△ 25 (△ 42)	△ 21 (△ 11)	△ 10 (△ 56)	△ 30 (△ 38)	△ 20 (△ 55)	21 ( 74)
貿易外尻	△ 21 (△ 14)	△ 31 (△ 20)	△ 33 (△ 13)	△ 25 (△ 16)	△ 38 (△ 11)	△ 35 (△ 12)
経 常 尻	△ 46 (△ 56)	△ 52 (△ 31)	△ 42 (△ 43)	△ 55 (△ 22)	△ 58 (△ 44)	△ 14 (△ 62)
長 資	22 ( 10)	59 ( 21)	41 ( 34)	41 ( 7)	62 ( 15)	21 ( 79)
短 資	28 ( 76)	3 ( 49)	10 (△ 42)	△ 8 (△ 9)	52 (△ 30)	△ 15 (△ 87)
資 本 尻	50 ( 87)	61 ( 69)	51 (△ 8)	33 (△ 2)	114 (△ 15)	6 (△ 8)
誤 差	3 (△ 6)	3 (△ 18)	△ 7 (△ 2)	3 (△ 8)	△ 30 (△ 16)	5 ( 18)
総 合 尻	7 ( 25)	13 ( 21)	1 ( 32)	△ 19 ( 12)	26 ( 13)	△ 3 ( 72)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

	38年 1~3月	4~6月	7~9月	38年 7 月	8 月	9 月
	3月	6月	9月	7月	8月	9月
織 維	94 (+ 3)	100 (- 13)	114 (- 0)	117 (+ 11)	119 (+ 6)	105 (- 15)
化 学 品	25 (+ 30)	29 (+ 32)	27 (+ 33)	28 (+ 16)	29 (+ 76)	24 (+ 20)
金 属	80 (+ 71)	81 (+ 31)	84 (+ 23)	88 (+ 37)	83 (+ 18)	81 (+ 16)
機 械	112 (+ 23)	117 (+ 2)	154 (+ 23)	149 (+ 16)	154 (+ 29)	160 (+ 23)
雑 品	33 (+ 33)	37 (- 3)	42 (+ 1)	44 (+ 6)	45 (+ 8)	37 (- 12)
合 計	415 (+ 21)	443 (+ 2)	503 (+ 12)	504 (+ 15)	512 (+ 16)	493 (+ 6)
米 国	118 (+ 23)	135 (+ 8)	147 (+ 9)	149 (+ 20)	152 (+ 7)	140 (+ 1)
ア ジ ア	103 (+ 21)	105 (+ 5)	113 (+ 14)	113 (+ 12)	117 (+ 26)	108 (+ 6)
欧 州	51 (+ 20)	54 (- 5)	59 (+ 12)	62 (+ 32)	54 (+ 6)	61 (+ 1)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%),各期月平均。  
アジアはインド、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。  
欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

ている鉄鋼も、欧州向けは近來芳しくないが、米国向けは持ち直しの傾向にある。また国内では、新鋭設備の稼働を控える鉄鋼メーカーでは、先行き操業度を高める必要からある程度価格面の不利は押えても西欧向けホット・コイルの引合いに再び応じようとする動きもうかがわれる。したがって、輸出は各国の輸入制限の動きなどから先行き問題を含みつつも、ここ当分はまず高水準で推移するものと予想される。

一方、輸入は為替、通関とも前月比10%程度の減少となり、ここ2〜3ヵ月続いた高水準は、ここへきてさすがに増勢一服となった。しかしなが

ら、9月は例年輸入の落ち込む月であり、季節調整をしてみると、たいした減少ではない。これを品目別(通関)でみると、食糧、繊維原料、非鉄金属鉱、機械などが減少しているが、減少額の4割近くまでが台湾糖の着入一巡や輸入価格の低下などからくる砂糖輸入の一時的落ち込みによるものである。先行指標をみても、信用状ベースでは8、9月と若干減少しているが、信用状なしの輸入の増高から、輸入承認はここへきて一段と増加傾向を示している(9月の本行調べによる輸入承認の without L/C 比率は50%をこえている)。その内容をみても、食糧、金属原材料が再び増加しており、輸入の先行きは当分高水準を改めないものと思われる。この間、メーカーの輸入原材料在庫手当は総じて落ち着いた歩調を続けている。また在庫率もほぼ適正水準まで回復しているところからみても、今後は在庫率を急激に押し上げるような積極的な在庫積み増しは考えられず、輸入は原材料消費に対応して漸増傾向をたどるものと思われる。

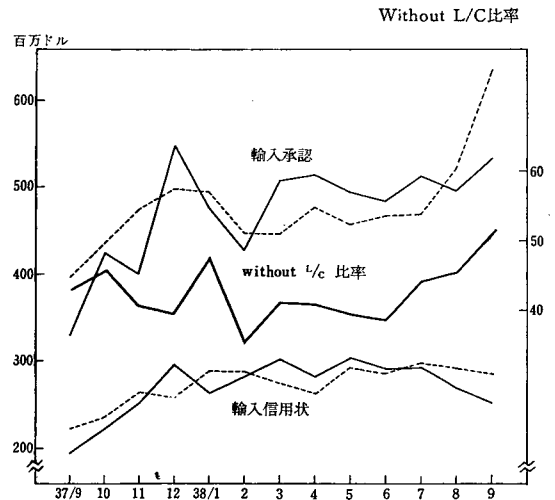
### 輸 入 承 認 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	38年 1~ 3月	4~ 6月	7~ 9月	38年 7月	8月	9月
食 料	74 (57)	90 (63)	88 (56)	86 (53)	83 (58)	95 (58)
原 材 料	274 (236)	298 (247)	295 (218)	303 (223)	294 (223)	289 (208)
原 綿	45 (32)	31 (33)	30 (27)	34 (28)	25 (25)	30 (25)
原 毛	31 (27)	31 (26)	26 (20)	29 (23)	24 (17)	25 (21)
鉄鉱石	19 (18)	24 (19)	24 (21)	25 (22)	23 (21)	24 (21)
くず鉄	11 (15)	20 (13)	22 (10)	24 (7)	19 (12)	22 (11)
石 炭	10 (10)	9 (13)	48 (12)	12 (11)	13 (13)	12 (11)
石 油	57 (35)	50 (48)	48 (38)	46 (44)	50 (37)	49 (34)
木 材	26 (18)	33 (21)	28 (22)	27 (24)	30 (23)	26 (20)
鉄 鋼	5 (12)	7 (3)	7 (5)	8 (4)	5 (7)	7 (6)
機 械	72 (55)	48 (66)	53 (51)	52 (50)	51 (72)	57 (32)
そ の 他	51 (44)	63 (48)	71 (46)	65 (44)	68 (44)	81 (50)
合 計	475 (403)	506 (428)	515 (377)	514 (374)	501 (404)	528 (355)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

### 輸 入 先 行 指 標 の 推 移



(注) 輸入承認は本行調べ。点線はセンサス法による季節調整済み計数。なお、Without L/C 比率は輸入承認に占める割合。